2月9日　　マタイによる福音書13章10～17節
「私たちは幸いである」

私たち人間は、様々な動物がそうであるように「保守的な生き物」です。多少不自由を感じていたとしても、大きな変化を望まなければ私たちは「予想通りの日常」の中で生き続けることが出来ます。それが私たち人間の、「動物としての幸せ」なのだと思います。

ただ、私たちの神様は、私たちに動物のように生きることを望んでいるわけではありません。だからこそ、神様は旧約聖書において律法を人間に与えました。神様を敬い、その言葉を守り、隣人を尊重し、隣人と共に協力し合って生きる、それを望んで人々を導いたのです。

今日の個所では、イエス様は直前の「種まきのたとえ話」について、たとえ話を語る理由が、その真意を悟ることができる人とそうではない人がはっきりと分かれることにあると語っています。また、「あなたがたは幸いだ」という言い方によって、イエス様を信じることができ、たとえ話を理解できることが大きな幸いであると言われています。

この言葉は、この時代を生きる私たちにも重くのしかかってくる言葉であります。聖書を読んで、イエス様の言葉を聞いて「確かにそうだ」と感じても、表面的な事しか理解することが出来なければ、私たちは決して「幸い」となることは出来ません。実際に初代の教会の中にも、洗礼を受けてもなお「心では理解せず悔い改めない」人がいたようです。洗礼を受けたから大丈夫、善行を行っているから大丈夫だというわけではなく、本当に心の底からイエス様への信仰が必要であり、いつも神様の望みに従えているのかを考え続ける必要があるのです。

実際に、「あなた方は幸いだ」「私のたとえを理解している」と言われた弟子たちですが、彼らは結局、全員イエス様の十字架を前にして逃げ出してしまいました。しかし、その弟子たちを、全身全霊をもってイエス様に従うことができるように変えたのが、イエス様の十字架と復活だったのです。

私たち自身もまた、「自分のことを気にして、神様のことを第一に考えることができない」という罪の中にいながら、しかしイエス様の十字架によってその罪を「償わなくてもいい」とされています。そして、復活の約束によって、人生が死で終わる空しいものではなく、死の先において神様から大きな恵みが与えられるという希望によって支えられているのです。私たちの幸いは、このようにイエス様の十字架の結果として、私たちが「罪のことを気にせず生きることが出来る」「死をいつも恐れずに生きることが出来る」という部分によって支えられているのです。それこそが、私たちはイエス様の言葉によって導かれ、信仰によって得ることが出来る大きな「幸い」なのです。

「自分の国が一番大事」「仲間を大事にすればいい」という本能的な考え方は、私たちが生きていく上でいつも私たちの思考の端にあり続ける、大きな誘惑となることでしょう。安心したいという思いは誰もが持つものです。しかし、何かを変えて新しいことを始めることに対する不安に打ち勝って、「今小さくされている人にも安心を届ける」ことを追い求めることができるのが、私たちの信仰の力なのだと思います。

少なくとも私たちは、それができるほどに、神様に言葉によって力づけられ、勇気をもらっているはずです。「今までの自分でいい」と殻にこもるのではなく、「より神様が求めていることを行っていい」と背中を押されているのです。その力を与えてくれているのが、私たちの持つ信仰なのです。神様によって支えられている心強さを胸に、今週一週間の歩みを、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：マタイによる福音書 13 章 10～17 節

- 10:弟子たちはイエスに近寄って、「なぜ、あの人たちにはたとえを用いてお話しになるのですか」と言った。イエスはお答えになった。「あなたがたには天の国の秘義を知ることが許されているが、あの人たちには許されていないからである。持っている人はさらに与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、悟りもしないからである。こうして、イザヤの告げた預言が彼らの上に実現するのである。／『あなたがたは聞くには聞くが、決して悟らず／見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍り／耳は遠くなり／目は閉じている。／目で見ず、耳で聞かず／心で悟らず、立ち帰って／私に癒やされることのないためである。』しかし、あなたがたの目は見ているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ。よく言っておく。多くの預言者や正しい人たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」